

エンジニアリング産業の 未来

千代田化工建設株式会社
[代表取締役会長]
一般財団法人エンジニアリング協会
[前 理事長]

久保田 隆

Takashi Kubota



今日はエンジニアリング産業の未来について以下の観点から意見を述べさせていただきたいと思えます。

ご案内の通り、世界のインフラの市場は継続的に拡大しています。今後の20年間で、電力インフラ、水インフラ、 hidrocarbon プラントのそれぞれで数百兆円の需要が見込まれる巨大市場です。一方、日本機械輸出組合の「プラントエンジニアリング成約実績調査報告書」によりますと、日中韓の実績は、2007年は日本236億ドル、韓国426億ドル、中国776億ドル。2011年は、日本275億ドル、韓国650億ドル、そして中国1393億ドルとなっています。

このように日本のエンジニアリング業界は巨大な市場を取り込めていません。いかにしてこの巨大な市場を取り込んで、日本の成長の柱のひとつにできるかがわが国のエンジニアリング産業の真価を図るものとして問われています。

まず1点目は、長期的視野での全体のManagementの重要性です。エンジニアリング産業の業務は、設計を行い、グローバルに最適な機器資材を調達して、現場で施工・完工させ、顧客に引き渡す、という全体のManagementです。日本には、「すり合わせ」という優れた文化があります。これを生かして全体を最適にManageするとともに、完成後もプラントを維持・管理し、場合によっては運転にも責任をもつという長期的視野に立った取り組みが従来以上に要請されており、これにどのように対応していくかが要点と認識しています。

2点目は現地化の推進です。現地化は時の流れ

です。エンジニアリング産業ではすべてを日本から仕切る時代は過去の遺物となっており、プラントを現地の人とともに作り、維持管理していくことが必須となっています。千代田化工の場合、従来のカタール、インドネシアに加えて今年アブダビでもこの目的に沿う会社を設立しました。現地には多数の優秀な若者がいます。現地人技術者の育成を柱として一層の現地化を図っていくことが今後インフラ輸出の鍵となるとみています。

3点目は、官民一体での大型案件取り組みです。私は今年2回、安倍総理の官民ミッションのメンバーとして当該諸国を訪問しました。日本では従来あまり取り組んでこなかった官民一体での、特に大型インフラ案件についてのビジネス展開を図る取り組みは非常に有効であると考えています。

4点目は、ファイナンスとの連携です。エンジニアリング業界が手がけるインフラプロジェクトは、長期かつ巨額の資金を必要とする案件が多く、国際協力銀行（JBIC）などの信頼性の高い日本の公的金融機関への期待は世界中で高まっており、ファイナンスがプロジェクトの実現の鍵となるケースが増えてきています。また、インフラ輸出促進のためのM&Aの資金でもエンジニアリング産業が日本の公的金融機関に期待するところは大きいです。

エンジニアリング協会は海外投融資情報財団に大阪での共催の講演会（ENJOIセミナー）開催などご厚誼を賜っております。この場を借りて厚く御礼申し上げますとともに、海外投融資情報財団からのさらなるご支援をよろしくお願いする次第です。